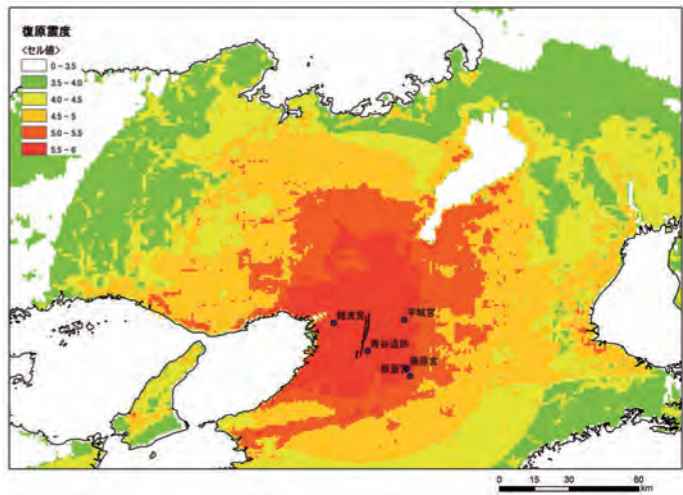
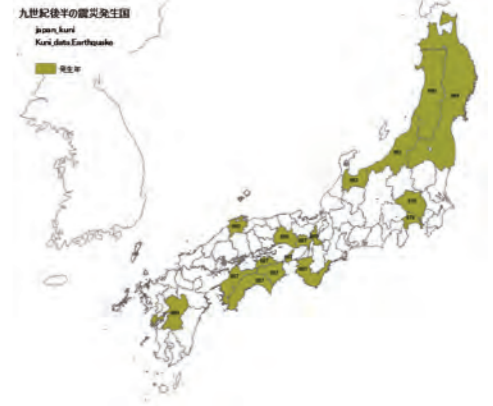


研究室 訪問

「高度な知の創成と的確な知の継承」——。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねた。

今回紹介するのは、社会文化科学研究科(文)の今津勝紀准教授。日本古代について研究する歴史学の研究者で、近年はコンピューターによる災害史のシミュレーションに力を入れている。東日本大震災の発生から、防災への関心が高まる今、情報科学を駆使した研究を通じ、先人たちから学ぶことの大切さを説く。

古代の災害を「シミュレーション」歴史から進むべき道を判断



中心。数値化してシミュレーションされることはほとんどなかったという。そんな中、自然科学研究科(理)の隈元崇准教授とともに取り組んだのが、天平6(734)年に近畿地方を襲った地震や貞観10(868)年に播磨地方で起きた地震の復原だ。まず文献から地域の被害状況を調べ、地震の起こった場所(活断層)や規模を推定。地震波の伝わる経路、地形や表層の地質などさまざまな要因を考慮

し、震度分布のシミュレーションⅡ図下参照Ⅱを作成した。天平6年の地震の規模はマグニチュード7.5と推定され、広い範囲で震度5.6の揺れが起こり、最大震度は7程度と考えられた。

古代史はアイデア勝負

資料が残る限り、過去の地震は全て研究の対象。「日本では揺れの大きかった地震についてはかなり記述が残っている。これほど記録によって過去をつかまえられる国は世界でも珍しい」という。「もっと資料があれば、さまざまな分析ができるのにと、思うこともある。でも限られた資料の中で、いかに読み方や発想、見方を変えるか。『古代史はアイデア勝負』と言いたい。

過去から学び、今に活かす

いにしえの人々が自然災害にどう対処してきたか、過去から学ぶことは多い。「古くから、津波が襲ってきた範囲を外すように道を作り、津波で冠水する場所を避けて集落ができるなど、経験は地域に蓄積されてきた。それなのに、いつの日か忘れ去られ、近代では新しい土地開発、街づくりによってしまっただけの問題として終わらせることなく、今こそ、それぞれの地域で、いっような地震や災害があったのか学び、どう行動するべきか考えるべきだ」。歴史は現代に生きる者たちの道しるべでもある。「現代社会は大きな転換期。長いスパンで人間の社会がどう変わっていくのか提示することも歴史学を研究する私たちの務め」



今津 勝紀

社会文化科学研究科 准教授

- IMAZU Katsunori (48歳)
- ▶1963(昭和38)年 東京都江戸川区生まれ
- ▶1986(昭和61)年 岡山大学文学部史学科卒
- ▶1988(昭和63)年 岡山大学大学院文学研究科修士課程(史学専攻)修了
- ▶1991(平成3)年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程(国史学専攻)研究指導認定退学
- ▶2007(平成19)年 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授